
バトルスクール・エフェメラル

いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルスクール・エフェメラル

【Nコード】

N5317I

【作者名】

いろは

【あらすじ】

異世界の学校エフェメラル。そこは、生徒たちが”唱術”を用いて戦う場所だった。勝者には富と栄光が与えられるが、敗者は生きてきた全ての記憶を失ってしまう。神月白亜は普通の高校生だったが、突然現れた美少女メイド(?)のイリスと出会い、エフェメラルへと導かれる。白亜はエフェメラルで少女たちと出会い、共に戦い、守っていくのだが / 基本的に主人公最強ハーレム系 / (更新再開です!)

朝のダイニングルーム。テーブルには私と父、母の三人が座っていた。みんな一様に暗い雰囲気で、重い空気があたりにたちこめている。

「……どうしても、行くのか」

父が言った。私は黙ったままこくりと頷く。

「ミアとローラを助けないから」

ミアとローラとは、私の二人の妹だ。不幸にも二人とも重度の心臓病を抱えていて、このままでは長くは生きられないと医者に言われている。

そして、我が家にはお金がない。父母の稼ぎを合わせても口に糊するのが精一杯で、とても医者にかかる余裕など無い。一方で心臓病の治療ともなれば、豪邸が建つほどのお金が必要となる。

言ってしまうば、妹は死の運命を背負って生まれてきたのだ。そしてそれを救済する制度は存在しない。

しかし、一つだけ二人を助ける方法があった。それは、私が”エフェラル”の生徒となることだ。不幸中の幸いか、私の魔力はエフェラルの生徒となるための基準値を満たしているらしい。

エフェラルの生徒になればその家族には莫大な報奨金が与えられるとともに、可能な限りの望みを一つ叶えてもらうことができる。

私はその望みを使って、妹たちの病を治してもらうつもりだ。

しかし世の中にうまいだけの話などない。エフェメラルの生徒となることは同時に、ほぼ確実に訪れる一つの人生の終わりを意味している。

すなわち 敗れ去れば、これまで生きてきた全ての記憶を失うということだ。

エフェメラルに入学する数千人の生徒は互いに戦い、最終的に八人だけが八聖珠として生き残ることができる。八聖珠となれば絶大なる地位と名声、巨万の富が約束されるが、一方で敗れた者は全ての記憶を失ってしまうのだ。

私は数千分の八に自分になれると信じるほど愚かでもなければ、自信家でもない。自分が生き残るために死力を尽くすとしても、それは周りの者と同じ事なのだから。

記憶を失って”しまう”と取るか、記憶を失う”だけ”と取るかは人それぞれだろう。しかし私にとって家族と生きてきた年月はかけがえのないもので、失いたくなんかない。

私と父が黙っていると、母が嗚咽を漏らした。それにつられ、私の頬にもひとしずくの涙が伝う。父は泣くのをこらえているようで、歯を食いしばってうつむいていた。

「ママ、泣いてるの？」

後ろの方から声がした。振り向くと、寝ぼけ眼をこするローラの姿があった。ローラは私とは少し年の離れた上の妹で、まだ眠ると

きにはぬいぐるみを手放すことができないでいる。今も胸に熊のぬいぐるみを抱いている。

「お姉ちゃんも、泣いてるの？」

「ローラ……」

私は目をこすった。

「お姉ちゃんね、ちょっと遠くに行かなくちゃならなくなっただんだ」

「遠くってどこ？」

「……ずっと、ずっと遠くなの」

「いつ、帰ってくるの？」

ローラの質問に、私は困った。

まさか、もう帰ってこないなんて答えられない。

厳密に言えば、帰ってくることはできないわけではない。しかし帰ってきてても、変わり果てた私を見て家族はきつといたたまれなくなるのだらう。だから私はここに戻ってくるつもりはなかった。

「ローラが大きくなったら帰ってくるよ」

「どのくらい大きくなったら？」

「そうね……セカンドスクールに入る頃にはきつと帰ってくるから」

今はまだ事実を受け入れられるような年ではないが、もう少し大きくなって落ち着けば、きつと分かってくれるだらう。そして願うなら、私に負い目を感じずに生きて欲しい。

私の言葉に、ローラの表情が歪んだ。

「やだよお、そんなに長くなんて、待てないよお。お姉ちゃん、どこにもいかないですよ」

ローラが泣き出す。

「ローラ」

私はローラの肩を両手で抱いた。

「私がない間、ローラがミアのお姉ちゃんとして面倒を見なきゃいけないんだからね。ほら、しっかりしなきゃ」

ローラをぎゅっと抱きしめる。それはローラを勇気づけるためでもあったが、自分の涙を悟られないためでもあった。ローラに気付かないよう、私は涙をこぼす。

しっかりしなきゃ。ここで私がしっかりしなきゃ、ローラを不安にさせてしまう。ローラの記憶には、笑顔の私を刻んであげたい。

「ちゃんと帰ってくるから、ね？」

それは嘘だった。

「……うん」

ローラのくぐもった声が聞こえてきた。

「だからほら、笑顔でいよう、ね？」

私がエフェメラルに旅立つのは明日だから、家族と過ごせる時間

はもう今日一日しかない。この貴重な時間を、悲しみの中で無駄に
したくはなかった。だからせめて、今日は笑って過ごしたい。

私は頑張って笑顔になった。あえて、作るとは言わない。心から
笑っていたいから。

ローラから身体を離し、自分の笑顔を見せる。

「いい子にしてたら、早く帰ってきてくれる？」

「うん、ローラがいい子にしてたら、きっと早く帰ってこれるよ」

「本当？」

「本当だよ」

私は微笑んだ。それを見て、ローラの表情も少し柔らかくなる。

「だからもう泣かないって、約束、ね？」

「うん、約束」

その言葉は、果たしてローラに言ったのだろうか。それとも、自
分に言い聞かせたのだろうか。

もう、泣かない。

私というこの人格が存在してられる限り。

Chapter 2 / Stranger 「闖入者」

「んがあっ!」

昼前の教室。俺は脳天に強烈な衝撃を受け、もんどりうって椅子ごとひっくり返り、地面に倒れ込んだ。頭を抑え、その場にうずくまる。

「あ、が、が……」

「授業中にヨダレ垂らして爆睡とはいい身分だな? 神月^{カミツキ}」

頭上から数学教師の声が聞こえた。ちらりと見ると、俺の頭をぶつ叩いたらしい出席板を手に持っている。その声に混じって、周りからクスクスと俺を笑う声がある。うるせえ、人が苦しんでるのがそんなにおかしいかよ!

……そりゃまあおかしいだろうなあ。他人の不幸は蜜の味。

「特別課題と特別補習、どっちがいい?」

「廊下に立ってる、つてのはダメですか?」

「馬鹿もん、誰が逃がすか。そういう態度なら、お前にはたっぷり宿題を用意してやる。楽しみにしてるんだな」

そんなあ、殺生な。買ったばかりのRPGがいいところなのに。

この数学教師の柿崎、普段は温厚なのだが不真面目を働くと途端に厳しくなると有名なのだ。だから俺も普段は気をつけて真面目に授業を受けていたのだが、いかんせん、昨日買ったゲームがあまりに面白くて夜更かししすぎてしまったのだ。

だけど、今のはどう考えても体罰だろ。目玉がぶっ飛んでくかと思っただけの。教育委員会にチクるぞ、こん畜生。

俺は内心で柿崎を呪いながら、ひっくり返った椅子を直そうとした。そこで、隣の女子に被害を及ぼしてしまっていたことに気付く。ごめんと謝り、俺は椅子に座り直した。

そして元通り、数学の授業が再開される。黒板には二次関数のグラフが書かれており、等式やら不等式やらが呪文のように書き殴られている。そう、柿崎の文字はミミズが いや、セイウチがのたかったように汚いのだ。

加えて、自慢じゃないが俺は数学が苦手だ。人は、現代というものには数学を基礎にして成り立っているのだから重要なのだと言うが、俺にしてみりや道具が使えさえすりゃいいわけで、こんな方程式やら不等式が解けたからって何の役に立つんだ、と思う。

ああ畜生、数学のない世界に旅立ちたいなあ……

数学の無い世界というわけではないが、俺は今見ていた夢のことを思い出した。

それはそれは、不思議な夢だ。

夢の中で、俺は少女になってしまふのだ。少女として考え、行動する。いや、正確には自分が考えているのではなく、少女の思考をなぞっている感覚なのだ。

その世界は圧倒的な臨場感を持っていて、俺が少女の夢を見てい

るのか、少女が俺の夢を見ているのか分からなくなってしまいそうなほどだ。

世界は中世く近代ヨーロッパのような雰囲気、どこかファンタジックな印象を持っている。特筆すべきは、魔法みたいな”唱術”というものが存在していることだ。

それだけだったら、俺も単なる夢と思ったかもしれない。しかし、この夢を見たのは一度や二度ではないのだ。3年くらい前から数日に一度、合計にして数百回は見ているだろう。

それが何の意味を持つのか、俺は理解することができなかった。ただそういう現象が事実として存在しているだけだ。全く、摩訶不思議にも限度というものがある。

少女は名をリルカ・マイヤーと言い、俺と同じくらいの年頃に見える赤いショートヘアの子だ。性格は優しく家庭的で明るい。とても妹思いで、二人の妹からは慕われている。顔立ちは可愛らしく、プロポーションも均整が取れている。ぱっと見、非の打ち所があまりなさそうだ。

なんでプロポーションまで知っているのかというと……その、あれだ。夢で見たときにリルカが入浴中のこともあって、鏡に映った自分の姿を見てしまったことがあるのだ。しかし俺の意思で身体は動かないのだから視線を逸らすこともできず、つまりは仕方がなかったんだ、うん。

って、俺は誰に言い訳をしているんだ。

これを単なる夢と割り切るには、あまりにも情景がクリアすぎる。

夢つてのは本来もつとカオスなもんだろうが。例えば知らないうちに俺が連続殺人犯になっていて、逃げていたら突然スーパーマリオの雲のステージに出て、そこをクリアしたら金だらいが雨のように降り注いできたりとか。

だから俺はこんな想像をしていた。俺が見る夢はここではないどこかの世界に過ごす誰かの風景なんだと。そう考える方が夢が広がっていいじゃないか。

しかし気になるのは、いつもとは異質な今日の夢の内容だ。悲しみに沈むリルカの家族に、エフェメラルという存在。そして、記憶を失うつてのはどういうことだ？ 戦い？ 八聖珠？ 分からないことが多すぎる。

一方的な俺とリルカの付き合いは、彼女へのシンパシーを生み出していた。思考をなぞっているせいなのかもしれない。まるで彼女が自分の一部であるかのような、そんな愛おしさを感じさせる。

だから、今日の悲しみはまるで自分のことのように感じていた。病気かな、俺。

「神月！ またボサつとして、いい度胸をしてるなお前は！」

うげ、やべえ、また怒られた。いかんいかん、今はまず授業に集中しよう。これ以上ペナルティを増やされたらたまったもんじゃない。

「はっはっは、また災難だったなあ白亜^{はくあ}」

昼休み、俺の正面にはランチメイトである市ノ瀬隆^{いちのせ}が座っている。茶色のオシヤレボウズの男だが、俺はコイツのことを親しみを込めて「猿」と呼ぶことがある。

「笑い事じゃねえよ。あさってまでに問題集12ページだぞ？俺の頭でどうしろってんだよ」

「1ページ1食で引き受けるぜ？」

「……半分くらい頼もつかない」

隆は驚くべき事に数学が得意科目なのだ。何でも、今使っている問題集はもう終わらせてしまっているとのことだ。人外か貴様は。

「ところで、今日はリルカちゃんに会えたのか？」

夢のことは隆も知っている。あんまり親しくない人に話したらキモがられることこの上ないだろうが、隆とは中学からの付き合いであり、十分信用できると思っていた。

「ああ」

「いいよなあ、俺もそんな美少女と知り合いになっみたいぜ」

「夢で見ることのどこが知り合いだよ」

「夢がきっかけで親しくなって、そこからはじまるめくるめくロマンス。くうー、たまんねえぜ。エロゲだよエロゲ」

「いや、聞けよエロ猿」

こいつは自分の世界に入ると外野の言うことが通じなくなる。全く、困った奴だ。だから猿なんだったの。

「で、ぶっちゃけた話どうなのよ」

「何が？」

「リルカちゃんのことだよ。好きなんだろ？」

何を言ってるんだコイツは。

「好きとかそういう問題じゃないだろ。何が悲しゅうて空想みたいな存在を好きにならなきゃならないんだよ」

同情してしまったというのは内緒。

「何だよ、夢がないなあお前は」

「年中妄想という名の夢を見るお前には言われたくない」

断っておくと、隆は結構なエロゲオタクだ。15、6歳なのにエロゲをやっているというのは……まあ、公然の秘密と言うことにしておこう。どっかの泉こなたもやってたし。

そんなわけで、俺もちよこつとオタクの道に踏み込んだりしている。奴の汚染力は半端無いのだ。だって、次から次へと「これ面白い」「これやってみろ」って持ってくるんだぜ？ しかもイチオシのものばかりだから、実際面白くないはずがない。そりや感染するわ。

だが、エロゲにまではまだ手を出していないと断言しておく。

「だってよお、これはもう運命だと思うよ？ きつともうすぐお前はリルカちゃんと出会って、そこから色んなストーリーが始まるんだよ。俺が言うんだから間違いないに決まっている」

「分かったから少しだまれ。それと、お前の存在が間違ってる時点で信憑性なんてものはないぞ」

「なんだよー、いけずう」

「やめんか気持ち悪い」

下らないを通り越して頭が悪すぎるやり取りをしていると、にわか教室の中が騒がしくなった。何事かと俺は周りを見回してみる。

「お……おい、あれ、見ろよ」

隆が教室の入り口の方を指さして言った。俺はそつちを見てみると

絶句した。

そこにいたのは、フリフリの服にヘッドドレス　いわゆるメイド服をまとった女性　いや、少女だった。更に驚くことに、腰ほどもある長い金髪をきらびやかにびかせ、瞳の色は透き通るように青い。どんな写真でも見たことがないような、まさしく空想を体現したような姿だ。

そして、言葉を失うほどに美人だった。美しさの中にあどけなさを残しているような、そんな印象を与えている。年の頃は俺たちとさして変わらないように思える。ちよつと幼いせいで服に着られていたという印象も無くはないが、それでも綺麗だった。

場違いにも程があるような存在だ。

「生きてて良かった……俺、もう死んでもいい」

そんなことを呟いたのは隆。お前、そんなことでいいのか。
俺がため息をつくと、隆が抗議の声を上げる。

「だって、金髪メイドだぞ!? しかも超絶が付いても足りないほどに美人なんだぞ!? 萌えの究極系なんだぞ!？」

「分かったから離れる鬱陶しい。それと、まず疑問を抱けお前は」
ざわめく教室の中を少女は歩いていった。まさか、誰かの知り合いにこんな娘こがいるのか？

しかしどう見たって日本人じゃないんだし、そんな知り合いがいるなんて聞いたことがない。

あれか、隆の妄想が極まって現実に出現してしまったとかそういうやつか。

……そんなことを考えてしまう時点で俺も大概ダメだな。

少女はあたりを見回し……また歩いた。

そして、俺の横で足を止めた。まさかと思い、ドクンと俺の心臓が一際高く鼓動する。

「お迎えにあがりました、白亜様」

何を言っているのか分からなかった。状況が飲み込めず、口の中がカラカラに乾いていくのが実感できる。

周りはもうざわざわなんてレベルじゃない。きゃーきゃーわーわーといった騒音のレベルだ。俺に関して何を言われているのか、正

直想像したくない。

しかもなんだ、白亜”様”？ 俺を様付けで呼ぶなんて、何なんだ君は？

メイドに知り合いがいるなんて寡聞にして知らないぞ。

「君、は？」

「私、わたくしイリス”デア”ラングートと申します。今日から白亜様の付き人をつとめさせていただくことになりました。どうか、お見知りおきを」

そう言うと、イリスと名乗った少女はスカートの裾を両手でつまんで片足を後ろに下げ、頭を下げた。まさか現実にこの仕草を見ることになるうとは。

それにしても、流暢な日本語だった。俺は生まれてこの方、ここまで見事な日本語を話す外国人を見たことがない。むしろ、そこら辺の日本人より上手い。暖かみを感じさせるというか。

「は、ははははくはくはくあ、お、おおおおおまおまおまえ一体」

言葉にならない言葉を吐きだしているのは隆。ダメだこいつ、完璧に混乱してる。ていうか、混乱したいのは俺だよ。ある意味泣きたい。

これは何だ、新手のナンパか何か？ それともドツキリか？ あるいは罰ゲームか？

「付き人って、一体」

俺の言葉に、イリスは微笑んだ。

「詳しいお話は後ほど致します。ここは落ち着きませんし、そうですぬ……どこか喫茶店にでも参りませんか？」

いや、俺このあと午後の授業があるんですけど。サボれってことですか。

しかし今の俺にとって、サボるのサボらないのということは正直どうでも良くなっていた。突然飛び込んできた非日常の正体を解明しないことには、何も手に付かないっての。

好奇心は猫を殺すが、人間は殺さない。

「え……と。ああ、分かった」

今の俺には、そう返事をするのが精一杯。

「ありがとうございます。それでは、参りましょう」

イリスが歩き出す。俺は食べかけの弁当をそのままに鞆だけを持って、歩き出したイリスの後をついて行った。ざわめく騒音と突き刺さるような視線が痛い。痛すぎる。うう、あまり目立たないように意識して過ごしてきたのに。さらば俺の平凡ハイスクールライフ。こんにちは俺のストレンジハイスクールライフ。

こうして、俺は人生ではじめて学校をサボることになったのだった。

否応なしに好奇の視線が矢となって降り注いでくる。

昼下がりの繁華街は交通量も少なく、人影もまばらだった。PCバッグを持ったサラリーマンや着飾った主婦、制服姿の女子高生なんかをちらほらと見ることが出来る。なんだ、あいつらもサボリかよ。

道路に沿って洋服店や飲食店が並ぶこの通りはデートコースとして有名だった。休日なんかにはカッパルで溢れかえり、そんなところを一人で歩けば「俺、何やってんだろ……」と落ち込むこと請け合いになれる場所である。

しかし今、俺の隣には金髪メイドさんが並んでいる。それも超絶美人の、だ。そういう意味では今の俺は天文学的に勝ち組なんだろうな。実際、すげえ気分がいい。

なるほど、可愛い彼女を持った男の気持ちってこんな感じだったんだ。いや、彼女じゃないけどさ。

だけど、元々俺は目立たないことを主義として生きてきた。表舞台に立つこともなく、槍玉に上がることもなく、平々凡々と学生生活を送っていた。ぬるま湯に浸かるがごとく、だ。そしてそれは概ね正解であったと記憶している。

それが、今はなんだ。クラスでは思いっきり注目の的となり、道を歩いては視線が突き刺さる。俺の主義とは真逆に行くではないか。出る杭は打たれるのが日本という国。うーむ、後が怖い……

ついでに言うと、視線の半分には殺気が混じっているような気がする。怖えぞ、おい。

「どこかお勧めのお店はございますか？」

イリスが聞いてきた。お勧めのお店、ねえ……

本音を言うと、さっぱり分からなかった。女の子とスイーツ巡りに出るような気概でもあったなら分かったのかもしれないが、何せ相方がエロゲオタクのエロ猿だ。原色風味の女の子が並んでいるような店しか知らない。

メイドカフェにリアルメイドを連れて行くか？ それもまた一興。
……いや、止めておこう。

どうか女の子を多く見かけられるような店でも探すか。女の子の客が多いって事は、それだけスイーツなんかも充実してるって事だろうし。

思っていると、一件の店が目にとまった。茶色のレンガを基調としたオシャレな店だ。しかし、客の半分以上が制服姿の女子高生ってどうなのよ。サボりすぎだろあんたら。警察が来たりしたら大捕物になりそうだな。

「ここなんかどう？」

「素敵ですね」

それを肯定の言葉と受け取り、そこに入ることにした。

……考えてみりゃ俺も制服姿か。

「いらつしゃいませ」

店内に入ると、予想通りにいくつもの視線が俺たちの方を向いた。しかし、今度の好奇の対象はどうやらイリスであるようだった。

「わあ、すつごーい。ねえねえ、かわいいー」

「メイドさん？ ってことは、ツレの男ってどっかの御曹司だったり？」

「きれー。お人形さんみたい」

「見て見て、あの髪。サラサラだよー」

「北欧美人ってやつ？ ありえないっしょ」

好き勝手言ってくれちゃってまあ。だけど、取りあえず俺の悪口はそんなになさそうで一安心。「なにあの男。美女と野獣ってやつ？ キャハハハ」とか言われるのを覚悟してただけだな。

いやまあ、野獣というようなツラじゃあないと自負はしてるが。

……多分。

イリスを窓際のソファ一席に座らせ、俺もその対面に座る。そして間を置かずしてウエイトレスの女性が水とメニューを出しにくる。さて、どうしようか。俺はあんまり甘ったるいの好きじゃない。となると無難にレアチーズケーキか。いや、ヨーグルトマンゴーパフェなんてのも捨てがたいな。

イリスの方を見てみると、優雅な仕草でページをめくるところだった。うーむ、絵になる。

「あ」

イリスが声を漏らした。

「ん？」

「ごめんなさい、長々と」

「いや、ゆっくり選んでいいよ」

「いえ、いいです。決めました」

うーむ、せかしてしまっただか。

俺はテーブルの注文ボタンを押した。程なくして、ウェイトレスが注文を取りにくる。

「ご注文はよろしいですか？」

「あ、はい。えーと、ヨーグルトマンゴーパフェとオリジナルブレンド」

「私は苺とクランベリーのミルフィーユ・グラッセとローズヒップ&レモングラスを」

「かしこまりました」

……なんか注文した品で生活レベルが割れてるぞ。すみませんね、風情のない奴で。

さて、と。これで準備は整った。

「それでは……何かからお話致しましょうか」

「正直、何が分からないんだか分からないってレベルなんだが」

あまりに非日常すぎて何を聞けばいいもんだか。手がかりが無さ

すぎる。

「そうですね……では、改めまして自己紹介させていただきます」
イリスが静かに言った。

「私は従者養成機構”ファイアーテ・フェーダー”から派遣され、
白亜様の付き人となるためにここノギアへと参りました。年齢は1
5歳で身長155cm、体重は……秘密です」

言つて、ぺろつと舌を出す。
秘密にするような体型かなあ。すっごいスタイル良さそうに見える
んだが。……まあ、女性の体重を気にする奴は馬に蹴られるとも
言うからして。しかし、俺と同じ年だったとは。

うーむ、ファイアーテ・フェーダーにノギア、か。自慢するつも
りはないがさっぱり分らん。

「好きなものは白亜様と苺、嫌いなものは虫です」

好きなもの……って、俺!?

えええ、まさか可愛い顔してストーカーってことは無いだろうな
あ。そりゃこんな美人に「好きです」なんて言われたら喜ぶべきと
ころなのかもしれないが……なんかフクザツ。

「そして、私の目的は白亜様を”八聖珠”へとお導きすることです」

ん……八聖珠!?

その言葉には確かに聞き覚えがあった。夢の中、リルカが思っていたこと。エフェメラルの勝者がたどり着く地、八聖珠

どうして、夢と現実が繋がるんだ。そして、それは何を意味する？

「……エフェメラル？」

俺は疑問を確かめるため、核となっているであろうワードを口にした。

すると、イリスが露骨に驚いたような表情を見せ、目を丸くする。

「なぜ、それを……。ノギアの人が知っているはずは」

「夢で見たんだ」

「夢？」

俺は一瞬、説明したものかどうか迷ったが、笑われるかもしれないとつまらないことを気にしていても仕方がないと思った。手がかりになることは全て話すべきなのだろう。

「ああ。変な夢でさ、俺はリルカって女の子になって、その思考をなぞるんだ。三年くらい前から、頻繁に見る夢でさ。んで今日、そんな言葉が出てきた」

説明すると、イリスが少し考えるような素振りを見せる。

「……そう、ですか。ひょっとしたら、『ハーモナイズ』という現象かもしれない」

「ハーモナイズ？」

「ええ。『運命因子』が近い場合に稀に発生する現象です。睡眠時、遠く離れた人に同調して、その思考をたどるんです」

運命因子？ なんじゃそら。

まあ、置いておくか。本題から逸れるし。

だけど、イリスの言うことが本当なのだとしたら

「それじゃあ、リルカって子は実在するのか？」

「ええ、間違いないでしょう」

驚くと同時に、俺は何とはなしに嬉しさを覚えていた。リルカが虚構の存在ではなく、実在していたわけなのだから。

同時に、一つの疑問が浮かぶ。

「んじゃ、リルカが夢で俺のことを見ていたりもするってこと？」

正直、これはちょっと想像したくない。俺にだって見られたくないシーンの一つや二つはあるわけで。まあ「散々見ておいて何抜かすか！」てなことにもなるわけだが。

「いえ。その可能性は相当に低いです。運命因子の他に同調率の関係もありますので、互いが互いの夢を見るということは滅多にありません。もっとも、ハーモナイズ自体が極めて稀な現象なのであります……」

「そっか」

ほっ、よかった。

胸をなでおろしていると、店員が注文した品を持ってきた。テーブルに品々が並ぶ。

「俺もミルフィーユにすれば良かったかなあ」

隣の芝は青く見える。カラフルなのも見た目すごく美味しそうに感じるのだ。

「交換いたしましょうか？」

「いや、いいよ」

変な気を遣わせちゃったかな。俺が認めただかどうかは別として、イリスは俺の”付き人”だと主張してる。ってことは、俺に気を遣うのはおおよそ当然の帰結なわけで。

少し、言動に注意しよう。

「んじゃ、いただきますー」

「いただきます」

俺とイリスはそれぞれスイーツに口を付ける。

うん、美味い。まるやかな甘みがヨーグルトの酸味と絡んで口の中に広がる。

「あ、おいしい」

イリスの顔がほころぶ。

うん、事情はどうであれ、やっぱり女の子の笑顔を見るのは気持ちがいいな。

「白亜様も召し上がってみますか？」

うーむ、いいのかなあ。けど遠慮するのも何だし、ちょっといた

だくか。

「ああ」

俺は自分のスプーンで、イリスのミルフィーユに手をつけようとした、のだが

それより早く、イリスがフォークで一欠片取って俺の目の前に差し出してきた。左手はこぼしてもいいようにとその下に添えられている。

こ、これはひょっとして

「はい、どうぞ」

微笑んで言うてくる。俺は一瞬躊躇したが、笑顔には逆らえずそれを口にする。

「いかがですか？」

「……うん、美味しい」

美味しいのだが、それはミルフィーユの持つ味だけじゃなく、別の精神的な何かが調味料として加わっているような気がした。なんだなんだ、周りの俺たちを見る微笑ましげな視線は！

「ですよね」

そして、イリスがまたミルフィーユに口をつける。

……完璧に恋人同士ですることだろ、おい。周りの視線が更に痛

く感じる。みんなこっち見てるってば。勘弁してくれイリスさん。

「ところで、白亜様。エフェメラルに関してはどの程度ご存じですか？」

本題に戻されたところで、俺は気を取り直した。

「うーん、生徒同士が戦って八聖珠を目指すってことと、勝ち残れるのは何千分の八ってこと。あと、負けたら記憶を失うってこと……かな。あと、エフェメラルに入れば報奨金をもらって望みを叶えてもらえて、八聖珠になれば富と名声が約束される、とか」

戦うつても中身が分からないから何とも言えないが、記憶を失うってのはのびききならない。さっき、イリスは俺をエフェメラルに導くって言ったよな。ってことは、俺をそんな危ない場所へ引き込もうとしてるってことか？ 冗談じゃないぞ。

「ええ、そうですね。重要な部分はおおよそ白亜様が仰った通りです。間違いはございません」

言つて、ハーブティーに口を付ける。

「いくつか質問が……っていつか分からないことだらけなんだが、聞いてもいいか？」

「はい、どうぞ」

「まず、付き人ってどういうことなんだ？ エフェメラルに入るのと何か関係があるのか？」

突然現れて「私が付き人です」なんて言われても、正直困ってし

まう。いや、全てを理解した上でこんな美人さんが付き添ってくるならそりゃ三つ指ついてお願いしたくもなるのだが、状況が分からないままそれに従ってしまうほど楽天的ではない。

「基本的に、エフエメラルに入る生徒には全員に付き人が付けられます。まずエフエメラルへと導き、その後は私生活の面でサポートを行うのがつとめです。そうですね、絶対服従の召使いとも思っていただければよろしいかと」

ぜ、絶対服従の召使い！？

穏やかじゃねえな。俺が何かとんでもない命令を下したとしても従わなきゃいけないってことだろ？ そんなの、いいのかよ。その……あれだ。うーむ、いやらしい妄想が真っ先に浮かんでくる辺り、俺はダメな人間なのかもしれない。

しかしまあ、それ以外は見たまんまのメイドさん、ってところなのかな。

メイドがいるなら執事がいたっていいような気がする。いや、俺にそんな趣味はないけどさ。

「付き人って、女の人って決まってるのか？」

「原則的にはそうですね。男性であれば女性の付き人の方が喜ばれますし、女性ですと男性の付き人は避けられる方も少なくありませんので。一応、その後の希望で変更することはございます。ただ……」

イリスが言いよどむ。

「申し訳ございませんが、白亜様の付き人は私と決められておりま

して、変更することはできません。どうか、ご了承を」

なんだ、なんで俺には選択権がないのだ。差別か、この野郎。

ま、別にいいけどさ。仮にイリスが付き人になつてくれるとするなら、不満なぞあるうはずもない。これで料理が核地雷級とか、掃除の度に家具をぶっ壊すとか、そんなスキルがあったりしたらうん、まあ、それもチャームポイントか。

……やばい、猿に毒されてる。

「ま、変更したいなんて全然思わないけどさ」

「チェンジ」なんて言われた日には、絶対軽くドン凹みするよな。間違いなく。

言わないけど。

「ありがとうございます」

イリスが微笑む。うん、笑顔はまた飛び抜けて輝いている。メイドさんは齒が命。

……いや、輝いてるのは齒だけじゃないけど。

「じゃ次の質問。戦うっていうのは、具体的に何をやるんだ？ まさかスポーツやゲームで、ってことも無いだろうし」

「半分はゲームに近いものですね。ただゲーム形式の”実戦”なので、相応の危険は伴うのですが……」

「実戦？」

「はい。唱術を使つての戦いです。生徒には”ゼスト”と呼ばれるライフポイントが与えられ、戦闘に敗北するとこれを1つ失います。

ゼストを全て失うとゲームオーバーとなります」

「唱術、ね……」

その言葉にも記憶があつた。ほとんど魔法みたいなシロモノで、呪文を唱えて超自然的現象を引き起こす。実際にお目にかかったことはほとんどないのだが。

そんなことを思っていると、イリスが皿を横にどけてテーブルにスペースを作る。すると、その場所に赤色のキーボードが浮かび上がった。

「バーチャルキーボード？」

「はい」

光源はどこだ？

イリスが慣れた手つきでキーを叩く。何とというか、例えるならエスピアノをやっているようにもみえる。そんな指もほっそりと長く、透き通るように白い。

「白亜様、左手を出していただけですか？」

俺は言われたとおり左手を差し出す。するとイリスは俺の手を両手で包み込み、瞳を閉じた。

「少し痛いですが我慢してくださいね」

ぼわあ、とイリスの両手から淡い光が放たれる。それに伴ってほのかな暖かさが感じ取れ ん？

いて。

いてて。

いててててててて。いだだだだだだ。痛い痛い痛い。ちょ、
ちよっとイリスさん、痛いってば！

「す、少しどころじゃ
「
「終わりました」

イリスが手を離す。あー痛かった。

俺は痛かった手の甲を見ると、そこには魔法陣のような文様が描かれ、色は赤とオレンジの間をゆっくりと移ろっていた。

「これは？」

「紋章もんしょうじゆ珠と呼ばれるものです。唱術のアクセスユニットになるとともに、情報やステータス管理なども行うことができます」

ちよっと待て。俺はまだエフェメラルに入学するなんていってないぞ。まさか、入学するって前提でそんなものを取り付けたりしてるんじゃないだろうな。

「試しに、右手で中心の円に触れてみてください」

「……こうか？」

多少不安に思いながら、俺は右手で左手の甲に触れる。
すると、目の前の空中にディスプレイが浮かび上がった。

「うおー！」

すげえ。SFですよSF。映画やアニメでよく見かける空中スクリーンだ。かつけえ。

だけど、俺はちよつと疑問に思うことがあった。

「こんな魔法みたいなもの、見られたら大騒ぎになるんじゃないか？」

「大丈夫です。画面は操作者にしか見えないようになってますから。現に今、私の目の前にもスクリーンがあります。でも、見えていませんよね？」

「ふーん……」

何とも不思議な技術だ。

「では白亜様、左のメニューから『Data』 『Persona』

1』 『Status』を開いてみてください」

「どつやつて？」

「触れれば開いていきます」

言われたとおり、俺はメニューを辿っていく。その画面効果はまさしくSFで、俺はちよつとばかりウキウキとしていた。

いや、いかんいかん。まだエフェメラルに入るって決めたわけじゃないんだ。しつかりしろ、俺。

「何か出てきたな」

『Now Scanning. Please Wait a moment...』

画面表示に従い、俺はそのまま待った。三十秒ぐらいして、画面に何やらデータのようなものが表示された。

ユーザー名：未設定

魔力効果 1172 (S - -)

魔力防御 998 (A + +)

火 135 (A)

水 76 (B + +)

土 52 (B -)

風 241 (S -)

雷 236 (S - -)

時 110 (A -)

光 48 (B -)

闇 319 (S)

属性合計 1217 (S - -)

何だこりゃ。まるでRPGのステータス画面だ。

「いかがですか？」

「いかがですか、って……これ、何？」

「白亜様の魔力ステータスです。今お持ちの能力をあらわしたものです」

ふーむ、能力、ねえ。

基準が分からないから、これが凄いのかゴミなのかさっぱり分からない。

しかし能力が数値化されるなんて、ちょっと面白いかも。あれだ、体力測定なんかで自分の身体能力がデータになると妙にウキウキし

たくなるのと同じだ。

「もしよろしければ、私にも見せていただけませんか？」

「いいけど、どうやって？」

「右下の『Send』から、私の名前を選んでください」

Sendを押してみる。すると、メニューにイリスの名前が出てきた。それを押すと一瞬『Now Transfering...』と表示され、すぐに『Transfer Complete』と変わる。

しかし、端から見たらこれってかなり危ない奴なんじゃないか？
なんかわけのわからない阿波踊りみたいなものを踊ってるようにしか見えないだろう。

一方でイリスは手元のバーチャルキーボードを叩いている。なん
だろ、俺のにもあんな機能あるのかな。

そっぴや、コンピュータもマウスで操作するのは素人、キーボードで操作するのは玄人だったりするよな。ってことは、イリスは玄人に分類される人間なんだろうか。

「……凄いです、白亜様」

イリスが目丸くして感嘆の声を漏らす。

「凄いのか？ これって」

「ええ。全くの未経験でSクラスの魔力を持つなんて聞いたことがありません。知る限りでは、過去に上条祐一のA+が最高値だったと記憶しています。前代未聞ですよ」

ぜ、前代未聞なのか!?

うーむ、そう言われると悪い気はしない。

「そうか、俺って凄かったのか」

半分冗談っぽく言ってみる。

「凄い中でも特に凄いです。例えるなら、毒における紅あやねみたいなものです」

「……いや、その例え、マニアックすぎて分かん。そんな品種、はじめて聞いた」

「……すみません」

「取りあえず、君には毒マニアの称号を与えようか」

これにはイリスも苦笑い。

「参考までに、私のデータをお送りしますね」

イリスが軽快な手つきでキーボードを叩くと、俺の画面に『No
w Receiving Data』と表示された。そして画面が
切り替わる。

ユーザー名：イリス⇐デア⇐ラングート

魔力効果 236 (C++)

魔力防御 330 (B-)

火 7 (E-)

水 30 (C-)

土 24 (D++)

風	6 (E - -)
雷	5 3 (B -)
時	1 2 (E +)
光	7 7 (B + +)
闇	4 (F)
属性合計	2 1 3 (C +)

全体的に見て、俺のステータスよりも一桁近く低いな。属性で一番数値が高いのは光か。何となく、イリスのイメージにぴったりだ。

そう言えば、俺の属性で一番高いのは闇？ おいおい、俺そんなにダーク属性持ってねえぞ。何か納得いかねえなこん畜生。

「それでも、死ぬ気で修行したんですよ」

「例えば、どんな？」

「厳冬のなか滝業をしたり、火渡りをしてみたり……」

「イリスって、可愛い顔してさらりと冗談言うのな」

「……はい」

照れたようにつつむいた。可愛いってこと自分で認めやがったな。こんにゃろつ。

まあ、これで可愛くないなんて主張されても困るか。

「けど、申し訳ありません。正直申しますと……あまりに辛かったので、思い出したくないんです」

「……そっか。ごめん、変なこと聞いて」

「いえ、いいんです」

思い出したくもないほどの修行、か。

万年ぬるま湯につかってきた俺には想像もつかない世界だった。俺と同じ年の、それも儂げな感じの少女が死ぬほどの修行をしている、か。

「白亜様が凄いこと、少しはおわかりいただけましたか？」

「うーん……まだ全く実感は無いけど」

「きっと、すぐに実感されますよ」

まあ、エフェメラルに入ったら、の話なんだけどな。

「戦う、つてのは分かった。あとは一番気になってることもあるんだが……負けたら記憶を失う、つていうのはどういうことだ？」

聞くと、イリスの顔から笑みが消えた。笑って話せるようなことじゃないってことなんだろう。

「文字通りの意味です。ゼストを全て失いゲームオーバーとなれば、これまでに生きてきた全ての記憶を失ってしまいます」

「……何のために？」

例えばバトルロワイヤルでは戦闘シミュレーションと冠して殺し合いが行われていた。もしエフェメラルでの戦いの結果記憶を失うのなら、それはきつと意味や理由があるはずだ。

「白亜様は”^{トク}蟲毒”というものをご存じですか？」

「ああ。虫を一つの場所に詰め込んで食い合いをさせて、最後に生き残ったやつを呪術か何かに使ってやつだろ」

「ええ。エフェメラルはその”蟲毒”なのです」

エフェメラルが、蟲毒？

「戦いに敗れた者は、その魔力を結晶に換えて勝者に差し出します。勝者はそれを受け取り、より強大な魔力を得ていきます。こうして八人の”強大な術者”を生み出すことが、エフェメラルの存在意義なのです」

なるほどね、そういうことか。だから蟲毒、か。

「だけど、どうして魔力を差し出すことと記憶を失うことが結びつくんだ？」

「魔力とは想いの力。想いはエピソードからつづられるもの。両者は不可分であり、魔力を差し出すことは同時に生きてきた記憶を差し出すことにもなるのです」

ふーん、そういうものなのか。

「失礼ながら、きつと白亜様はご自身が負けることを恐れていることだと思います。しかし、ご心配には及びません。先ほど示しましたように、白亜様の魔力は桁外れなのです。負ける理由がございません」

イリスの言うとおりなら俺は負けることなく、恐らくは安全に富と栄光を手にすることができるようだろう。しかし話は将来に関わること、会ったばかりの人間の話を鵜呑みにするほど、俺はお人好しではない。

「でも、俺みたいに強大な魔力を持った人間が他にもいるかもしれないんじゃない？」

「それはございません」

イリスが言い切った。

「エフェメラルには多くの世界から生徒が集められます。レイルド、フィール、エルモなど……そして、ここノギア。世界によって魔力傾向は大分異なりますが、ノギアの人だけは魔力が桁外れなものです。ですが同時に、ノギアの人で魔力形質を持つ者は極めて稀でもあります。確認されている限り、現在ノギアで魔力形質を持つ

ているのは白亜様ただ一人です」

ただ一人、ねえ。それが真実なら、俺は宝くじよりも圧倒的に低い確率に当選してしまっただけか。一生分の運を使い果たしてるとか、無いだろうな。

「ですから、白亜様に並ぶ者が存在する道理はございません。白亜様には生まれながらにして八聖珠の座が約束されているのです」
「……なんだか、なあ」

富と栄光、かあ。イリスには悪いけど、正直そういうものに興味は無いんだよな。今の生活に特別不満を感じてるわけでもないし、俺は野心溢れる人間ってわけでもない。普通に生きて、欲を言えばちよっぴり贅沢ができれば十分だと考えているからだ。

俺にはわざわざ今の生活を捨てて戦いに身を投じる理由なんて見あたらなかった。強いて言うならば、リルカだ。エフェメラルに行けば彼女に会えるのかもしれない。しかし、会ってどうする？ 同じ生徒が戦う相手であるのなら、この手でリルカを傷つけてしまう可能性もあるってことだろう？

そんなのはまっぴらゴメンだ。

「悪いけど……ちよっと、興味を持つことはできないかな」

俺はやんわりと拒絶の言葉を口にする。それでイリスとの縁が切れてしまつとしたら仕方がない。もの凄く惜しいとは思いが……。俺にも譲りたくない部分というものがある。

「エフェメラルでも俺の身は安全ってことは分かった。だけど、エ

フエメルルでやることってのは、他人と戦って、記憶を奪うってことなんだろう？ 正直なところ、俺はそんなことをしたくない」

それが一番大きな理由だった。臆病者とののしられても、安易に人を傷つけるような真似はしたくなかった。

「というわけで、まあ、その、なんだ。悪いけど、他を当たってくれないか」

イリスは深く息を吐いて、少しうつむいた。

「……薄々、想像はしておりました」

イリスが静かに呟いた。

「きっと白亜様は覚えておいででは無いでしょうけれど、私、一度お会いしたことがあるんです」

イリスが俺に？

「……ごめん、全く記憶に無い」

イリスがクスリと笑う。

「だって、私、黒のかつらとカラーコンタクトをしてましたもの。それに、もう五年以上前の話です」

ああ、なるほどね。面影はあっても、イメージが全然違ってるってわけか。記憶にはあるのかもしれないけど、思い出せないんだろ
うな。

「その時、私、困ってたんです。白亜様にお会いして、どんな方なのかを知らなければならなかった。でも……勇気がなかったんです」

静かな声で、イリスが話す。

「そんなとき、白亜様が話しかけてくださったんですよ？ どうしたの？ 泣いてるの？ って。きっと私、悲しそうな顔をしてたんでしょうね」

「……あ！」

思い出した。小学生の頃、公園で悲しそうな顔をしてる女の子に話しかけたことがあった。記憶に焼き付いてる限りでも凄く可愛い女の子で、確かにイリスにその子の面影が見て取れる。

「覚えていらつしやいますか？」

「ああ。確かに覚えてるよ」

まさか、こんなところで繋がってたなんてな。

「でも、会ったのはその日だけだった。少し気になってたんだけど、どうしてたんだ？」

「元の世界へ帰ったんです。世界と世界を繋ぐゲート”ヴェルテントー”が開くのはわずか数日で、それを逃すと再び開くのは数ヶ月後なんです。だから、その次の日には帰らなければなりませんでした」

「そうだったのか」

世界と世界を繋ぐゲート、か。

つまり、イリスは異世界の人間ってところなんだろうか。何だか

実感ないな。

「ですが……その数時間の出会いで、私は白亜様の優しさに触れることができました。それだけで、十分でした」

うーむ、優しさ、かあ。どっちかっていうと単に臆病なだけって気もするんだが。臆病で人から嫌われるのが嫌だから、誰にでも愛想を振りまくし、好かれるような行動を取る……というか、取りたいと思う。それは、端から見れば優しさと区別がつかないんじゃないだろうか。でも根っこの部分でそれは優しさとは違う。

「だからきつと、白亜様は他人を傷つけることを恐れ、エフェメラルに来ることを拒否されてしまうのだらうと思っていました」

まさしく、その通りになってしまったわけか。

イリスが天を仰ぐ。その姿はまるで泣くのをこらえているかのようだった。

「そして……私にとって、他などございませぬ。私は生まれたときから白亜様の付き人となるために育てられてきました。どうして、他の人の付き人となることができましようか」

生まれたときから、か……

だとするなら、さっき話してた”修行”ってのも、全部俺の付き人になるためってことなんだろうか。俺のために、そんな血反吐を吐くような修行をしたのか。

そう考えると、イリスは一体どんな思いで俺に接してきたのだろうか。もし自分がイリスの立場だったら、きつと胸が張り裂けそう

になってしまおうと思う。それをイリスはおくびにも出さず、ずっと笑顔を浮かべたままだった。

そんな笑顔の奥に秘めた感情があったのかと思うと、胸が熱くなる。

「なあ、イリス」

「何です？」

「今、他の人の付き人になるなんて、って言ったけど、もし俺がエフェメラルに行かなかつたらイリスはどうするんだ？」

付き人が本来の役割を果たせないというのなら、その先は一体どうなってしまうんだろうか。俺は不安に思っただけ聞いてみると、イリスは少し戸惑ったような表情を見せた。

「詳しくは分かりません。が……噂だと、王侯貴族の妾として差し出されたり、娼館に売られたりすると聞いたことがあります」

「……なんだって？」

のっぴきならない回答に、俺は眉根をひそめる。

「一度”刷り込み”が行われた付き人は、別の主には忠義を尽くせなくなりますが。ですから、”女”としての価値のみが、存在できる理由になるのです」

「反吐が出そうな話だった。」

「……ふざけるよ。価値だの存在できる理由だの、まるで人をモノか何かみたいに考えやがって」

俺は怒りの言葉を口にしていた。全く、胸くそ悪い話だった。だが、イリスの返事は俺の予想外のものだった。

「白亜様、私は”モノ”なのです。今はまだファイアーテ・フェーダーで管理されている”商品”です。ですが……もし白亜様が認めてくださいれば、私は白亜様だけの”モノ”になることができます」

何なんだよ、モノ、モノって。

だけど、そう思ってるのはイリスのせいじゃない。全部、ファイアーテ・フェーダーとやらが吹き込んだことなのだろう。全く、ふざけやがって。

「イリス」

「はい」

「自分をモノ扱いするのはやめろ」

「……ですが」

イリスが納得できないような表情を浮かべる。無理もないのか、ずっとそう教え込まれてきたのだろうから。

「分かった。じゃあ、せめて俺のモノになれ。イリスがそのファイアーテ・フェーダーとやらにいいようにされてるなんて、我慢がならない」

自分でも乱暴な物言いだっただとは思って、それは素直な気持ちだった。どんな組織なのかは知らないが、このままじゃファイアーテ・フェーダーはきつとイリスを不幸にする。ただでさえ、いたいけな少女に過酷な修行を強いるような組織なんだ。妾や娼婦なんて言うに及ばず、だ。

それだったら 少なくとも、俺はイリスを不幸にはしれないと思う。

「……ですが、そのためには白亜様がエフェメラルに
「行ってやるさ。エフェメラルだろうが何だろうが」

俺は心を決めていた。

仮に俺がエフェメラルに行ったって、他の奴が倒すか俺が倒すかの違いが生じるだけだ。結果にはほとんど差はないのだろう。だったら、それくらいの泥水はすすってやる。イリスが悲しまなくて済むのなら、な。

「八聖珠にでも何でも、なってやるさ」

俺は言うが、イリスは黙ってうつむいていた。しばらくして顔を上げ、静かにその口が開く。

「白亜様」

「なんだ？」

イリスの頬をひとしずくの涙が伝う。しかし、つとめて笑顔を浮かべようとする。

「お気持ちは……嬉しいです。ですが、もう一度、ゆっくりお考え下さい。私は、白亜様に後悔はしていただきたくないのです」

凜とした口調で言った。

「このまま何もしていないでいる方が、後悔するに決まってる」

考えるまでも無かった。俺が何もしないせいで、イリスが苦しむ。そうと分かっている、黙っていられるわけがない。

「そう、ですか……」

イリスが静かに呟く。

「分かり、ました。ですが……一日、時間を置きましょう。きっと今の白亜様は冷静な判断ができなくなっています。もし冷静になって、考えが変わらなければ、その時は」

そこまで言いかけて、言葉を切る。

確かに、今の俺は冷静じゃないかもしれない。未知の出来事に遭遇して、イリスの置かれた立場を聞いて、これで冷静でいるという方が無理だというものだ。

しかし、冷静になったからといって考えが変わるとは思えなかった。きっと俺は明日も同じ選択をするだろう。そして、エフェメラルへと行く。もし自分に力が無かったとしても、多分気持ちに変わりはない。

「分かった。明日、か。どこで会えばいい？」

「どこでも結構です。私の方からお伺いしますので」

「どこでも、って、場所分かるのか？」

「ええ。この世界で魔力反応を持つのはただ一つですから、すぐに分かります」

はは、居場所が分かる、ねえ。

……間違ってもエロ関係の店には行かないようにしよう。うん。

「けど、今日みたいなのは勘弁してくれよ」

「今日みたいなのは、とは？」

「教室への乱入さ。おかげで注目されまくって、すげえ恥ずかしかった」

「注目されてた、んですか？」

おいおい、気付いてなかったのかよ。道理で平然とした顔でいると思った。

最初は何というかパーフェクトなメイドさんっていう印象だったけど、段々と印象が変わるなあ。ちょっと抜けた面もあるというかまあ、そんなくらいの方が可愛くていいけどさ。

「ま、いいか。じゃあ明日の午後一時くらいでいいか？」

それくらいなら、午前の授業が終わって場所を移す程度の時間が持てる。

「はい、かしこまりました」

この期に及んで学校に行く意味があるのかって話もあるが、行かないという理由が別段あるわけでもない。だから行くことにするわけ。もっとも、明日何を言われるかって意味じゃ”行きたくない”理由は十二分にあるのだが。

「それでは、『Document』フォルダにエフェメラルに関する説明がありますので、よろしければご覧になってください。面倒

でしたら、私の方から説明いたしますが……」
「ああ、ありがとう。取りあえず読んでみるよ」

残り、二十三時間。

それが、俺に残された最後の”日常”だ。

浴槽からお湯を桶に汲んで、目の前の鏡にかける。曇りガラスが洗い流され、椅子に座った自分の裸身が映し出される。

水に濡れた赤い髪が、窓からこぼれる光を反射してきらきらと輝いている。透き通るような白い肌は母親譲りで、私の自慢だ。身体はどちらかといえば痩せぎすで、胸のあたりにまで肉付きが悪いのは少し気にしていることでもあった。

顔立ちは、よく学校の同級生には可愛らしいと言われる。ぱつちりとした瞳には、翠玉の色が灯っている。眼差しの力強さは、よく父親に似ていると言われる。

まつげから、水滴が一滴落ちる。

左腕には、うつすらとただれたやけどの跡がある。私がまだ小さい頃、誤ってお湯をこぼしてしまってできた傷跡だ。その跡をつねってみるが、感覚は鈍い。

両親から受け継いだこの身体も、身体についた傷跡も、全部が私を形作るかけがえのない思い出だ。

そんな思い出も　これから先、数ヶ月で霧消してしまう。

止めどなく押し寄せる不安と絶望が心を苛^こんで、荒波に浮かぶ板きれのように私を翻弄する。私は知らないうちに、自分で自分の身体を抱いていた。食い込む爪が肌に傷を付けそうなほど、強く、強く。

だけど、泣かない　　気を抜けばたちまちに涙で溢れてしまいそうな両の瞳を、歯を食いしばって制止する。

泣かない。泣くものか。

例え誰も見ていなくても、私の涙を見るものは無くても、私は泣かない。せめて課せられた運命に抗いたくて、ささやかな意地が意志をより一層強固なものへと変える。

記憶を喪つというのは、一体どんな感覚なんだろうか。

積み上げてきた全てが破壊され、全く新しい自分として生まれ変わるということなんだろうか。

世にやましい思い出があるような人にとっては、むしろ願ったり叶ったりなのかもしれない。恩賞まで受け取って、人生をやり直すことができるのだから。

しかし　不幸というべきか、私には大切な思い出しかない。

失敗した思い出も、怒られた思い出も、思い出して赤面するようなことでさえ、かけがえのない大切な記憶だ。無くしたくない。

どうして、神様は私を候補生に選んだのだろうか？

ミアとローラを救済するため？

それならば、私はどうして私として存在しているのだろうか？

私という存在は、ただ生け贄として存在するだけなのだろうか？

私という存在に、救いをさしのべてくれる存在はないのだろうか？

やがて、黒い感情が身体の中でうごめき出すのを自覚する。二人に救済を与えてくれた神様には感謝すると同時に、どうしてこんなにも過酷な運命を自分に与えたのかと恨む気持ちもわき上がってくる。

怒りはやがてやり場のない絶望に飲み込まれ、荒波に浮かぶ板きれは岩盤に叩きつけられて粉々に砕け散る。

まるで、自分の未来を象徴するかのよう。

誰でもいい。

暗い深淵の底から、私を引っ張り上げて。

深い絶望の底から、私を救い出して。

希望の光を与えてくれるのなら、悪魔にだって手を貸してしまいたい。そうだ。

心の底まで暗黒に染まる前に。

誰か、私を助けて。

「助けて……」

ぼつり、と言葉が漏れた。

両腕に爪が食い込んで、
紅い雫がしたたり落ちた。

暗く深い絶望の底から、俺は目を覚ました。

重く淀んだ頭を持ち上げ、上体を起こす。制服姿のまま横になつてしまったせいか、身体の節々が痛む。俺は肩に手をやり、首をコキコキと鳴らした。

ええと……何をしていたんだっけ？

俺が我が家に帰ってきたのは、二時ちよつと過ぎだった。作家であるところの親父には「どうした？」と聞かれたが、「サボリ」と答えると、「そうかそうか、お前もやつとサボるような年頃になつたか。今夜は赤飯だな」と宣のたまいやがった。アホか、あの親父は。

で、上着を脱いでネクタイだけを外すと、俺はベッドに横になつて紋章珠を起動させ、エフエマルルに関するドキュメントを紐解いた。記されているルールを眺めながら、何だかMMOみたいなルールだなあと思つたものだった。いや、MMOなんて手を出さないけどさ。俺の性格だと廃人になるのは目に見えてる。

あれはシャレにならないと、中学時代の同級生が廃人になつてしまった経緯を知っている俺は思ふのだった。

んで、知らないうちに眠りに落ちてしまっていたわけか。今何時だ……

俺は枕元の時計を取る。針は四時半頃をさしていた。

それにしても 酷い夢だった。

リルカの悲痛なまでの心の叫びが、今も残響となって頭の中でこだましてる。身体は至って健康なはずなのに、頭がズキズキと痛む。

「神様よ……なんだってアンタはそんなに理不尽なんだ？」

意識せず、独りごちる。別に神様なんて信じてるわけじゃないが。

リルカみたいに優しく、周りから愛されるような人間が、どうしてあんなに苦しまなくちゃならないんだ。どうして、俺みたいないい加減な人間に未来を与えてしまうんだ。

両腕に、食い込んだ爪の痛みが残っているかのようだった。けどそれ以上に、心の痛みが深い楔となって俺の心を穿っていた。

それでも そんな絶望的な状況にも、一欠片の希望が残されていた。

それは、エフェメラルのシステムにあった。

エフェメラルでの戦いは、無差別に繰り広げられるわけではない。平日の11時半〜12時半と4時半〜5時半が戦闘時間として設定されているのだが、時間になると全ての生徒は戦闘フィールドのラウンドな場所に転移させられる。そこから戦闘は始まる。

そして、戦闘には”チャム”と”パーティー”というシステムがある。チャムとは仲間のようなもので、戦闘開始時に指定した相手と必ず同じ場所にエントリーすることができるらしい。パーティーはチャムを弱くしたもので、1日2回の戦いのうち1回だけ同じ場

所にエントリーできるとのことだ。

チャムは1人だけ設定でき、パーティーは最大4人まで構成することができる。チャム1人+パーティー1人+パーティーのチャム1人で計4人となる。

つまり、リルカとチャムを組んで彼女を守り続けければ　あるいは、彼女を八聖珠の座に導くことができるかもしれない。

もう一つ、手段は考えられた。

俺自身が強い魔力を持っていることを利用して、「リルカを攻撃する者はあまねくぶっ潰す」と公言してしまうやり方だ。ぶっっちゃけ、かなりエゲツナイ方法ではあるが……大抵の奴はこれで大人しくなるはずだ。もし手を出してくる奴がいれば　本当にやつつけてしまえばいい。

命まで取るわけじゃないんだ。

だがそんな2つの作戦も、完璧ではなかった。

エフエメラルでの戦いは3段階構成になっている。全校生徒が256人になるまでがレベル1、32名になるまでがレベル2、八聖珠が決定するまでがレベル3だ。

そして、レベル3ではチャムとパーティーのシステムは無くなる。戦闘は完全ランダムエントリーになるのだ。さらに、フィールドは通行不可能な4つのパーティションで分けられるようになる。

従って、別のエリアに配置されてしまうと助けることはできない。

自力で凌いでもらうしかないわけだ。

すなわち、レベル3では「本当に力のある者しか生き残れない」のだ。そして、そのレベルになれば脅しなんて意味を持たなくなるだろう。

詰まるところリルカを八聖珠に導くためには、彼女自身が鍛えられなければならないことになる。しかし通常の鍛え方で見込める成長は限られたものであり、生き残れる程の力を得るためには 他人を”喰らう”必要が出てくる。

なぜかというと、魔力の成長限界は初期値の概ね数倍程度であるらしいからだ。しかし他人の魔力を得ると、現在値のみならず成長限界までもが加算される。それが、わざわざ”蟲毒”なんてものを設けて食い合いをさせる理由なのだとか。

一方、リルカの力は 属性合計47のランクF。最下級だ。他の生徒がどの程度の力を持っているのかは分からないが、まともに戦うことすら困難じゃないかって気がする。仮に成長限界に至ったとして、恐らくは俺の現在値にすら遠く及ばないだろう。

ならどうするか。答は一つだ。

俺が他の生徒を倒し、得られる力をリルカに与えてやればいい。ゼストがゼロになった人間の魔力は結晶化され、勝者はそれを取り込むことで魔力を得ていくのだ。だったなら、他人にそれを与えることもできるはずだ。

限界まで能力を引き出すのは前提としても、その限界値を上げていかなきゃならない。

結局どんな方策を取るにしろ、俺は汚れ役を買って出なければならぬわけだ。

リルカを、そしてイリスを助けるために。

覚悟を、決めろ。

俺が誰かの未来を奪う訳じゃない。ほとんどの奴らは遅かれ早かれ未来　いや、過去か　を失うわけであり、手を下すのが他人か俺かの違いがあるだけだ。気に負うことも、臆することも無い。

そう　臆するな。

顔も知らない他人の未来のために、心から守りたいと願う者たちの未来を失うわけにはいかない。座が限られているのなら、どんな手段を講じてでも奪い取る。

それが　俺の信念だ。

守るため、俺は悪魔にでもなつてやる。

決意を新たにしたところで、不意に携帯電話が振動した。メールの着信を知らせるパターンだ。

俺は携帯電話を開いて、メールを確認する。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

6 / 1 6 1 7 : 4 1

S u b R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E

2 : R E 2 :

F r o m 猿

『 昼間の件の詳細を報告するように。全裸で』

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

いつもの調子に、俺は思わず苦笑してしまう。少しばかりささくれ立っていた心の中が、何となく毒気を抜かれたような感じになる。

俺は返信を打つ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

S u b R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E 2 : R E

2 : R E 2 : R E 2 :

T o 猿

『あとでガストにでも行かないか？ お前だけ全裸で』

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

送信、と。

決意してしまっただけ以上、もうこの世界にいられる時間も少ないはずだ。イリスがこの世界にやってきたとき、次の日には帰らなくてはならなかったと言っていた。状況が変わりないとするなら 明

日にでも俺はエフェメラルに向かって旅立たなくてはならないことになる。

そんな限られた時間の中で、別れる前に話をしておきたい人が何人かいた。隆もその中の一人だ。

それに……俺は、自分の考えに対する”保証”が欲しかった。

俺は携帯電話を畳んで、自分の部屋を出て一階に下りる。リビングルームにはソファに座って大画面の液晶テレビと睨み合っている親父の姿があった。

その手の中には、ワイヤレスコントローラー。画面には、仮想空間を縦横無尽に飛び回るロボットの姿。TPSという奴だ。

そして、俺はこの手のゲームで親父に勝ったことが無い。いい年してるクセをして、反射神経が人外というか、アクションゲームがやたらと得意なのだ。正直、悔しい。悔しすぎる。普通、親父つてのはアクションゲームじゃ息子に蹂躪されるのがあるべき姿だろうが。

「なあ、親父」

俺はもう一方のソファに腰を下ろし、話しかける。

「何だ？」

親父は手を止めることもせず、答える。このマルチタスクめ。

「その……なんつーか、俺が突然遠い場所に留学しなきゃならなく

なったら、どうする？」

ちょっと婉曲的に、自分の胸の内を説明しようとする。

「そりやまた抽象的な質問だな。留学、か。まあ寂しいとは思うが……肝心なのは、お前がどう思うか、だな」

画面ではアームズフォートと呼ばれる巨大要塞が沈むところだった。

「留学がお前にとって必要だったり、どうしても行きたい理由があったりするのなら止めはしないよ。お前がそういう強い意志を持つに至ったことを歓迎して送り出すさ」

「そっか」

俺は、どこまで説明していいものかを考える。戦い、なんてのはダメだ。いくら俺が安全な位置に立っているからって、心配させてしまうのは目に見えている。

「女の子が二人、いてさ」

言葉を選んで、言う。

「一人は、俺がそばにいなきゃダメなんだ。その……なんて言うか、その子は意に沿わない結婚を強いられてるんだけど、別に男がいるならその限りではない、っていうような感じで。その男役が俺で、さ」

「ほっ」

「もう一人は文通みたいなのをしてる子なんだけど、重い病を患ってるんだ。それで、俺の身体の一部を移植すれば助かるかもしれないな」

くて、俺はどうしてもその子を助けてやりたいんだ
「ふむ」

親父がゲームをポーズして、手を止める。

「それは、何とも美少女ゲームに出てきそうなシチュエーションだな」

こちらを見て、言う。作家という職業柄か、あるいはそういう性格が作家に仕向けたのかは分からないが、隆のみならず親父までもがいわゆるギャルゲーに造詣が深い。子としては、はっきり言って微妙な心境だ。

まあ……二人の妹がそれを理由に避けたりはしてないだけマシだとも言えるが。一応、家庭内は円満だ。

「そうか。お前もそんな年頃になったか」

腕組みをして、しみじみと、感慨深そうに言う。

「要するに、その子たちはお前の助けを必要としてるんだな？」

「ああ」

「だったら、何としてでも助けてやれ。お前も男だったら、その子たちの力になってやれ。父さんも全力で応援するぞ」

その言葉に、俺の胸に熱いものがこみ上げてくる。理解してくれた嬉しさというか、通じ合った喜びというか、そういったものが俺の涙腺を決壊させようとする。

同時に、本当のことを話せないことを少しばかり申し訳なく感じ

ていた。

「その子たちが外国にいて、そのために留学みたいなことをしなきゃならないってことだな？」

「ん……ああ、そんな感じ」

俺は曖昧な返事を返してしまう。元々、外面を嘘で塗り固めたエピソードなのだ、やはりボロを出してしまいそうになる。そもそも、どうして知り合ったのかなど、疑問に思われるような点多いはずだ。

しかしそんな俺に親父は必要以上の追求をしようとはしなかった。全く、よくできた親父だと思う。

「そうか。ところでお前、その国の言葉は大丈夫なのか？」

「え」

思わぬ切り口に、俺は思わず声を詰まらせてしまう。

イリスがあまりにも流暢な日本語を喋るからして失念していたが、実際問題として言葉の壁というのはどうなっているのだろうか。イリスは、エフエメラルにはいくつもの世界から生徒が集まると言っていた。話す言語も様々であるはずだ。

「その国ってというか、学校は留学生ばかりが集まるところだから、俺だけ困るってことは無い……と思う。多分」

嘘は言っていない。言葉の壁がどうやって解決されるのか不安ではあったが、きつとどうにかなるんだろう。イリスも特に何も言っていないかったし。

「そうか。まあ、知らない言語に揉まれるというのもいい経験になるだろう」

親父は言語についてそれ以上のことを言つつもりは無いようだった。

「しかし……この年で二股というのは、正直あまり感心しないな。本命は決めているのか？」

「本命って……そんなんじゃないよ」

全然予想していなかった方向からの攻撃に、俺は思わず言葉を詰まらせてしまう。

「好きだとか本命だとか、そんなことは全然考えてないんだ。一人は会ってそんなに経ってないし、一人は文通だけの関係だし、さ。今は……ただ、助けたいとしか思っていないんだ」

「そうか。まあ、そう思っているんだっいたら今はいいさ。だけどな、そんな気持ちは往々にして恋心が変わっていくもんだ。もしお前が二人を好きになったとき、お前が二人から惚れられたとき、責任だけは取れる男になれ。曖昧な態度で二人を傷つけるような卑怯な男にだけはなるなよ」

いつものおどけた調子とは違う、親父の男としての本質を垣間見たような気がした。

恋愛経験の乏しい　　というか彼女いない歴〃年齢の俺にとって、親父の話は実感の伴わない内容ではあった。だけど……親父が言いたいのは、彼女らを傷つけるなんてことなんだろう。俺は、その点にはしっかりと頷いた。

「ところで、いつ行く予定になってるんだ？」

「多分……明日かあさってあたりだと思う」

さすがに、これには親父も面食らったようだった。

「それは随分と急だな。ま、いいさ。お前や向こうにも事情があるんだろう。ところで、お金の問題は無いのか？」

あつけらかんとしたものだ。俺は追求されることを覚悟していたが、納得してくれたのでほっと胸をなで下ろす。

「ああ。その子がお金持ちの家でさ、そこら辺は心配いらないうて」

よくもまあ、ぺらぺらと嘘が出るものだ和我ながら感心してしまう。まあ、これは”いい嘘”だって考えていいよな。

「そうか。だが、一度決めたからには絶対に助け出すんだぞ。途中で逃げたりしたら父さんは許さんからな」

俺がはつきりと頷くと、

「よし。それじゃ、今夜は赤飯だな」

と、本日2回目の台詞を聞くことになったのだった。赤飯好きだなあ、赤飯。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5317i/>

バトルスクール・エフェメラル

2010年10月10日19時42分発行